

所内・共同利用研究におけるサル使用頭数の変化

「新しいサル像をめざして」(2002)

京都大学霊長類研究所人類進化モデル研究センター 編

釜 中 慶 朗

1983年度からの所内および共同利用におけるサルの使用頭数の変化についてまとめてみた。総頭数は1983年ですでに700頭を越え、1988年には860頭に達している。これらの内の7～8割がニホンザルとアカゲザルで占められている。出産数が実験利用数を上回る状況が続いたこと、サルの健康管理の向上などから病死などによる死亡数が減ってきたことなどがサル総数増加の主な要因と考えられる。霊長類研究所の放飼場、グループケージ、個別ケージを含めたサル類の飼育容量は800頭ぐらいが限界と考えられることから、1989年から実験利用の促進が図られ、サルの総頭数の抑制がおこなわれている。また、計画段階ではあるが避妊についても検討がおこなわれている。1995年から共同利用の所外貸与が開始された。これはサル利用の普及と全国での福祉に配慮した利用の確立をめざして開始されたものである。まだ多い数とは言えないが貸与希望が漸増の傾向にあり全国的に浸透してきていると言えよう。一方で貸与サルは研究所所属になっており、年度を越えて継続的に使用されるケースが増えたことにより所外での研究所所属サルの総頭数が50頭近くになるなど、管理面での問題を生じている。実験利用は、DNA実験などが微量な試料で可能になったこと、福祉への配慮がますます求められることになったことなどから1994年頃から再び減少の傾向を示している。研究所のサルは自家繁殖体制を確立して再生産がおこなわれ、病気などの検査体制も整ってきたことから極めて高品質な実験動物と言える。今後、所内と共同利用を含めてさらに有効な利用が進められていくことを望みたい。

年度	総頭数	ニホンザル	アカゲザル	実験殺	出産	共同利用採択件数	所外貸与件数	所外貸与頭数
1983	716	361	170	71	100	27		
1984	767	407	187	76	126	76		
1985	778	395	206	77	109	67		
1986	784	391	207	89	97	64		
1987	840	407	226	74	137	72		
1988	860	424	252	75	128	76		
1989	846	412	246	137	146	100		
1990	822	396	238	101	126	93		
1991	782	359	240	120	113	78		
1992	786	355	245	94	141	85		
1993	766	341	230	103	110	96		
1994	783	343	238	78	124	96		
1995	792	342	238	67	122	102		
1996	836	357	260	44	138	85	2	3
1997	833	371	245	74	126	98	4	6
1998	787	365	215	83	91	101	4	7
1999	770	375	193	88	122	89	7	20
								16

図1 総飼育頭数の変化

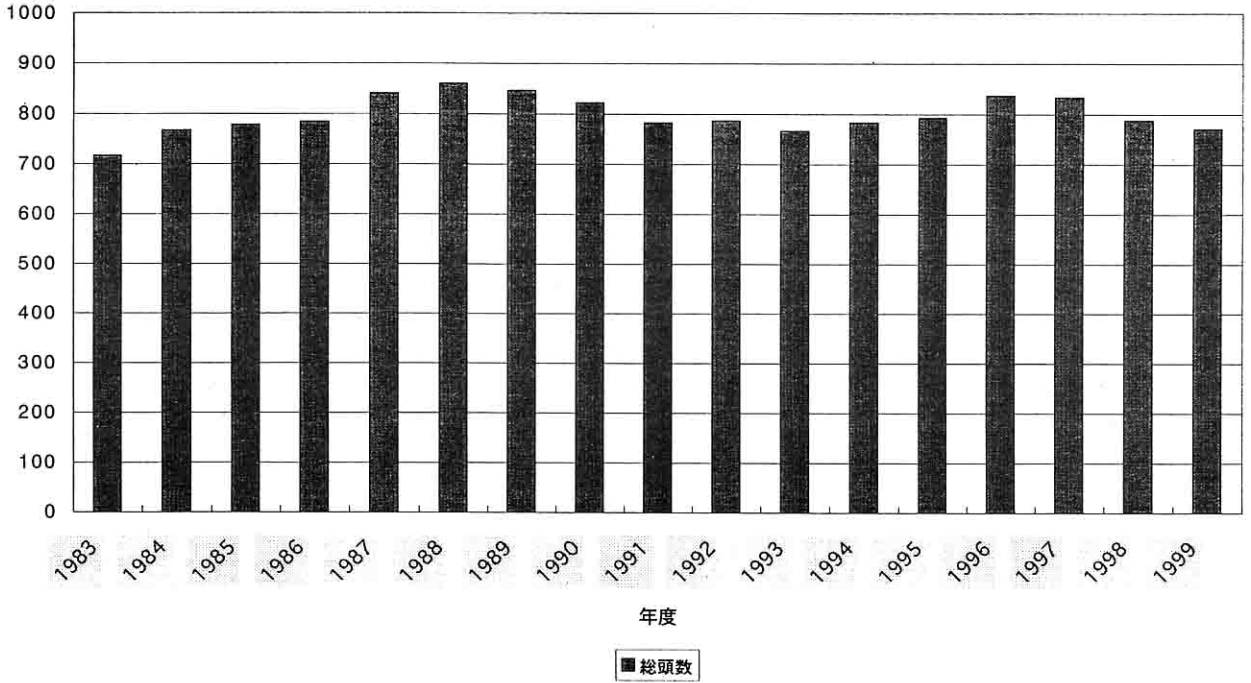
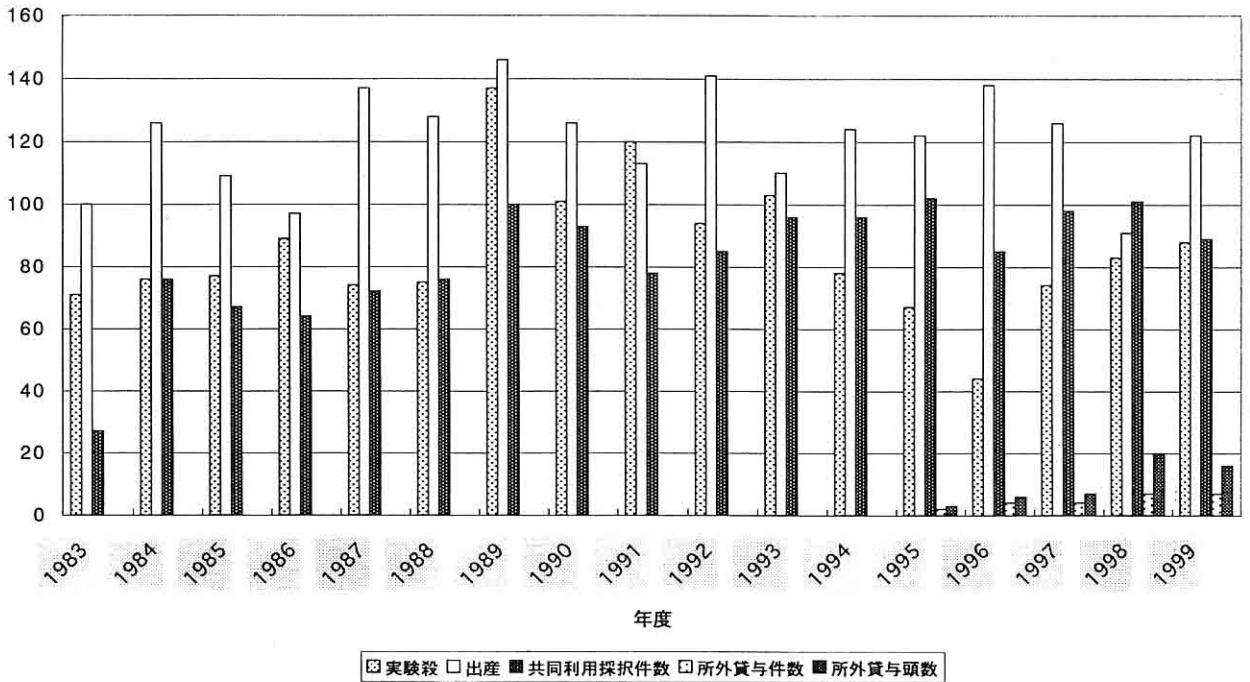


図2 使用頭数の変化



(かまなか よしろう、 京都大学霊長類研究所人類進化モデル研究センター)